特集　つながる，広がる，コラボレーション

国立台湾図書館との学術交流協定

木下（きのした）　和彦（かずひこ）
（メディアセンター本部課長）

関口（せきぐち）　素子（もとこ）
（日吉メディアセンター事務長）

1　国立台湾図書館との学術交流協定締結

2024年３月７日，台湾・新北市にある国立台湾図書館において，曹翠英国立台湾図書館長と須田伸一慶應義塾大学メディアセンター所長との間で，「学術交流に関する協定書」の調印式が行われた。

協定の趣旨は，その第一条「国立台湾図書館と慶應義塾大学メディアセンターは，学術的相互協力関係を構築して，図書館交流を発展させていくために，本協定を締結する。」に集約されている。想定される交流には以下のようなものがある。

・学術研究情報の収集および相互提供，相互の出版物や学術資料の交換
・事業の共同実施
・職員等の交流

図１　調印式
右：曹翠英国立台湾図書館長
左：須田伸一メディアセンター所長

2　交流協定締結の経緯

協定締結に至ったきっかけは，2023年６月の他大学の図書館情報学研究者からの問い合わせに遡る。その方のかつての同僚で，国立台湾図書館顧問である黄文哲氏が，同図書館からの日本視察にあたり本学メディアセンター訪問を希望しているが，受入れを検討してもらえるか，という内容であった。その後，黄氏とのメールで訪問目的は見学および連携や交流に関する相談であることを確認し，メディアセンター本部と三田メディアセンターで来訪を受けることになった。

８月23日午後に，黄氏と同館職員２名の計３名を三田に迎え，メディアセンターの概要説明や貴重書室等の案内の後，懇談の時間を設け，国立台湾図書館側の来訪の意図を改めて伺った。同館は2024年に開館110年の節目となるにあたり，多くの国の図書館との交流を広げたいという曹館長の強い意向があり，その可能性を探るため図書館見学を兼ねた訪問を企画したとのことであった。

なぜ国立台湾図書館が交流相手として慶應義塾を選んだのか，という点については，黄氏の経歴が関係していた。黄氏は東京大学で博士号を取得し，2022年３月まで国内の大学で教鞭もとっていた経歴があり，国立台湾図書館が日本の図書館との学術交流を検討する際に，日本の同僚からの意見を参考にした結果，慶應がその候補にあがった，ということであった。

しかしこの段階ではまだ情報が十分とは言えず，こちらから国立台湾図書館を訪問し，その上でどのような形・内容の連携や協力関係がありえるのかを

検討することになった。それに際してはメディアセンター所長が先方の館長を訪問する形が望ましく，時期を2024年３月と定めた。黄氏と秋頃から具体的に調整を開始していたが，12月中旬になり曹館長自らがこちらからの訪台に先んじて１月に慶應を訪問したい，との相談があった。夏は同館の職員のみの来訪であったため，先方としても館長が直接慶應の様子を把握したいということと，交流協定について所長も交えてより具体的な話し合いをしたいという意図を感じさせるものであった。

こうして2024年１月17日には，曹館長ほか同館職員２名の来訪を受けることになった。この時には全ての時間を協定締結に向けた意見交換に費やした。日本語に長けた黄氏が通訳の役割を果たしてくれたため，お互いに率直な考えを伝え合うことができ，曹館長の協定締結にかける意気込みを肌で感じるものともなった。

この意見交換により，協定は，学術情報資料の交換や職員の交流といった包括的な表現にとどめ，その実行に際しての必要経費は応分の負担とすること，協定は期限付きとして更新は双方の合意によるものとすることなど，かなり具体的な内容が見えてくるものとなった。

その結果，３月には国立台湾図書館において協定の調印式を行うという方向性で合意し，それまでの間にメールベースでの協定案の推敲がなされた。学内手続きも必要であり，協定案のリーガルチェック，学内の関係委員会の承認，国際協定締結に必要な稟議の決裁など，さまざまな手続きを進めていった。

これらの準備を経て，冒頭に書いたように３月７日に無事調印式が行われたのである。

図２　国立台湾図書館前にて

３　国立台湾図書館について

台湾には現在３つの国立図書館があるが，国立台湾図書館の前身は日本統治期の台湾総督府図書館であり，1914年に設立された台湾で最も古い図書館である。現在の場所（新北市）には2004年に移転し，名称は何度かの変遷を経て，2013年に国立台湾図書館と改称された。

国立台湾図書館はその由来から台湾総督府時代の資料を多く所蔵し，戦前の日本関係資料などの日本語資料も10万冊以上を数える。これらの資料や地方志などの中国語資料をもとに2007年に「台湾学研究センター（臺灣學研究中心）」を設置し，台湾学に関する研究成果の発信を精力的に行うほか，台湾について書かれた古い日本語資料の復刻にも取り組んでいる。

また開設当初から製本室を有し，製本技術者を日本から招へいして台湾の技術者に製本技術を伝えてきた歴史がある。現在は，「台湾図書醫院」を設置し，台湾において図書・資料修復の中心的な役割を果たしている。３月に訪問した際には，修復中の「法華経」の原本を見せていただき，その役割を実感することができた。

図３　修復された「法華経」

図書館の建物は地上７階地下３階で，地上１階～６階までが利用者スペースになっている。１階には「親と子の学習センター（親子資料中心）」や「視覚障害者のための情報センター（視障資料中心）」なども設けられている。蔵書数は175万冊，雑誌３千タイトル，新聞300種類，提供する電子ブック16万冊であり，誰もが利用できる図書館として年間200万人が来館している。

4　今後の展開

まずは職員同士の交流を通じてお互いの業務の理解を深めることから始める予定で，2024年９月には，先方から３名の職員がメディアセンターを来訪することが決まっている。台湾との交流でネックとなるのは言語だが，国立台湾図書館には日本語を操れる複数のスタッフがいるため，当面は日本語と英語とスマートフォンの日中翻訳機能でカバーできると思われる。お互いに共通した課題を見出して，こちらからもスタッフを派遣していきたいと考えている。

5　メディアセンターにおける海外の図書館との交流

メディアセンターでは，これまでも海外のさまざまな団体と関係を結んできた[1)]。しかしその多くは欧米諸国の機関であり，今回のようにアジア圏の図書館と交流する機会はあまり多くない。過去には2010～2014年にかけて延世大学図書館（韓国）と交流協定（MOU）を締結していたことがある。当時メディアセンターが運用していた海外製の図書館システムであるAlephを延世大学図書館が導入したことが交流の発端で，この時も先方からの申し入れがきっかけで協定が実現した。そうした経緯から延世大学図書館とは図書館システムに関する情報交換が交流の主となり，職員の往来が数回行われた[2)]。アジア圏は近くて行き来がしやすいため，欧米の諸機関とは交流の仕方も違ったものとなっている。

また，今回の訪台時には，国立台湾図書館からの紹介により，国立台湾大学図書館を訪問する機会を得て，短い時間ながら，メインライブラリ（総図書館），スペシャルコレクション，社会科学院辜振甫先生紀念図書館などを丁寧に案内していただいた。同大学は図書館システムとして本学と同じAlmaを使用しており，以前の延世大学との協定のように，漢字圏のユーザ同士の情報交換といった交流に繋がる可能性が感じられた。

6　おわりに

今回，協定締結の学内手続きを進める中で，事務部門が独自に協定を結ぶのは異例だと認識する場面が何度かあった。それはメディアセンターが国際交流をする意義を改めて考えさせられることにもなった。

協定に限らず国際交流をする理由は，メディアセンターが扱うのは世界中の学術情報であり，その収集，整備，保存などについては国内事情だけでなく，世界の動向を常に意識する必要性があるからである。今ではインターネットを通じて世界中の情報が瞬時に得られるようになっているが，業務の遂行という観点で見た時には，そこから得られる情報だけでは不十分であろう。今回のような包括的な協定であれば，漠然とした内容でも簡単なことであっても情報交換をしやすい土壌を作ることができる。そのような交流を通じて視野を広く持つことは，業務の幅を広げ，深めることにもつながるという点でも大切なことであろう。

協定締結から約１ヶ月後の４月３日，台湾東部沖でマグニチュード7.2の地震が発生し，花蓮市を中心に台湾東部に大きな被害が発生した。国立台湾図書館は震源地からは離れていたが，地震発生当日にお見舞いのメールを出したところすぐに返信があり，幸い職員は無事とのことで安堵した。しかし，実際には，館内は図書が散乱しただけでなく配管が壊れて漏水被害が発生したようであった。被害のあった施設の一部では，まだサービスを休止しており９月の時点でもその状況が続いているようである。

そのような中ではあるが，９月に職員３名の来訪が決まった。再会を喜びつつ，被害の状況などについても詳しく伺う予定である。また，こちらからも2011年の東日本大震災時の状況を共有し，震災対策や罹災時における相互支援についての意見交換をしたいと考えている。

参考文献

１）関口素子．海外との交流からSDGsを考える．MediaNet．2023，no. 30，p. 34-36.
２）田邊稔．延世大学図書館出張報告 ―図書館システム管理における協力体制の確立を目指して―（海外レポート）．MediaNet．2011，no. 18，p. 72-74.